

心中二ツ腹帯

第一

紅の云々紅は
園に植ゑても隠
れなしの謠をと
ぢ
おもき山脇一桑
山の重き意をと
りて小身者の山
脇重用さるゝ事

草に木にたとへて見れば若衆梅、女は櫻坊様の、山吹衣ま袖より、牡丹のさかりりと
した、武士の姿はおのづから、うぶにそみたる紅の、園生のたねや末葉迄。わきて遠烈
濱松は、御家中ひろき其中に、小身なれど手を置いて、おもき山脇十藏の、屋敷作のおも
のすき、其折節の月花に、かへて嗜む武藝の道。みぎりもふかきやぶがきの、むかふに
日あての塚をかまへ、本弓の稽古的、戸田卜齋を師範に立テ、門弟沼津奎之進、南條定
七はた源八、いづれも弓矢引つがひ、拳をかためひぢをはり、矢じりを揃へ聲をかけ、
我劣じと争ひしは、いかめしうこそ見へにけれ。卜齋はつくくんと、稽古に氣を付目を
くばり、「ホウおのく見事々々。射法力の入所、村のしよをき矢の輕重、羽の吟味にい
たる迄、残る所はなけれ共、どふでも體がかたまらぬ。あながち人に射勝たふと、思ふ

射る事は云々一
射有似乎君子
失諸正鵠反求
諸其身(中庸)
同名一同音

判形云々一山脇
の子たるを證明
する爲判する

如才者一疎略

計ははけみでない。一ぶんに油断なく、工夫の心すはりなば、自然と的中致すもの。す
 でに孔子の曰ふにも、射る事は君子にたとへ、あたられれば其身にもとむ。手前を直し
 随分と、功をつむこそ第一」と、さもこまやかにいふ所へ、あるじ山脇十藏は、同名半
 兵衛もろ共に、かしこに歸れば卜齋、「ハア十藏殿お歸りか。兼てお心やすさのまよ、お
 留守をもちへりみず、射場を借用仕り、ゆるく稽古致すだん、無禮の至り」と相述
 ぶる。十藏會釋して、「是は扱いたみ入る。よい場を持た品により、物ほしにさへかすな
 らひ。ましてや御念比といひ、殊にはかねて極の稽古日、在宿致す筈なれ共、同名半六
 只今は、名も半兵衛と改め、大坂の住居、町人に罷成候へ共、當所の人數改にて、
 年に一度は極つて、判形に罷越す。其義によつて今朝より、御役所へ召連出、それより
 一家のはしぐへ暫の對面。則今夜八ツ立に大坂へ立歸る、用意何かに取紛れ、不亭主
 の段御免あれ。コリヤ半兵衛、以前のお師匠友立衆、對面致せ」と詞の下、半兵衛慇懃
 に、「先以卜齋様、御息災に御しのぎ、ひとへに満足仕る。師弟のちなみ折々は、御恩の
 御見廻申ス筈。何をいふても只今は、商人の身のいそがしく、年に一度の參著さへ、昨
 晩參りて明朝は、罷上る仕合故、おのづからの如才者、御ゆるし下さるべし。奎之進殿

花うつぼ云々
うつぼは矢を入
れるもの八百屋
に矢をかく
はつかう一琴を
とる

ちらばねばーち
らねば
とうじー東寺に
て瓜の産地

ひがいすー庭弱
あぞいー怖ろし
い

定七殿、源八殿をはじめとして、御ぶさた計、顔見れば昔を思ひなつかしい。先は御無事で珍重」と、身は町人を卑下しても、どこやら武士の花うつぼ、八百やさするぞ惜しかりし。ト齋は手を打て、「扱もくく久しぶり、山脇半六時分より、殊の外肥満にて、屈強な若者。其骨柄を見るに付、思ひ出すはこなたの藝。今迄鍛錬せられなば、恐らくはつかうせん物と、つねく皆共此うはさ。町人とても隠し藝、折節射てもみらるよか、いかにく」と問ひかくる。半兵衛は打笑ひ、「仰のごとく私めも、折角ならひ受たる弓、何しにすては致さね共、町屋に道具ちらばねば、もとより學ぶ人もなく、宮地を心がくれ共、はやるは稽古淨瑠璃で、半弓も見當らず。たまくとごに瓜時分、とうじ駒野へ行足を、祇園の方へ廻廻り、稽古を見ればぞくと、遠慮も忘れ肌押脱ぎ、よつびき兵どやる風情、座中舉つて舌ふるひ、ひがいすな男じやが、扱てもおぞい弓力と、手を置れて歸りしも、偏に師匠のおかけごと、あだ疎略には存せね共、青物賣の風情故、残念ながらいつとなふ消えて仕まはん是非なさ」と、へりくだつてぞ語りける。上ム、さこそく推量した。五年十年射ぬとても、心を捨てねば下らぬ物。幸、塚も構へて有、久しぶりじやに只一手。其上是成奎之進、前かど互角の藝なりしが、すさむと勵む違にて、及び

はせまい去ながら、互に挑みし由縁有、いざ立合て勝負あれ。はやく見ん」とぞ勧めける。半兵衛押退り、「左様の論は武家の沙汰、我々しきが何共はや。御免々々」と辭退する。十藏は聲をかけ、「末練に見ゆる半兵衛。指當ててお師匠の、仰を背くは無禮なり。手練達者の沼津殿、町人が射負けしとて、少しも恥にならぬ事。罷出よ」と弓と矢を取添へて與ふれば、答に及ばず立上り、半「奎之進殿さりとては、久しうぶりのお相手」と、言へ共收めし不肖顔、頭を振れば半兵衛、「相手の不足は兎も角も、無興に見ゆる御出」と、詞をかくれど返事もなく、苦り切つたる其風情、定七見かねつと立、定時によつては氣無性に、進まぬ事も有物。某「相手」といはせも果す、奎之進聲を上、「ア、是々いらぬ物。師匠の御意を承る、我等さへ動かぬに、外のばいかい心得ず。ひかへられよ」と詞の下、「然らば拙者參らん」と、源内やがて立所を、鎧を取て引留め、奎ハレヤレ世話をやく衆かな。相手になればいづれもの、名が廢るが合點か。且はお爲を存る故、是非々々お控へなされよ」と、物有けなる有様に、座はしらけてぞ見へにける。半兵衛も愁ひに、無念に及べどさらぬ顔、「奎之進手が悪い。貴殿の藝を仕揚しとて、左のみ高ふは吹かぬ物。今は格別其以前、互に勝負を比べし時、五社明神の後堂、百本が一本

ばいかい—媒介

手が悪い—仕方がわるい

弓のこぶし一弓の藝

いはれぬ！無益の

身の要害に云々
一まさかの時の
爲に修業する

空矢なしに見せ付け、又掛川の大合にも、二日續けてるもぎに勝ち、其外機により折にふれ、餘程手ごりの覺がある。其意趣ならば猶以、わつさりと立合ん。いざ御出」といひければ、本之に進るせ笑ひ、「珍しい事いふ男。シテ先其方が某と、弓のこぶしに勝たと」ハテ先立てしれた事」「シヤ存外千萬な。其時相手に立たるは、慥山脇半六とて、御家中の武士友達、大坂の八百屋づれ半兵衛とやらん素町人、相手に取た覺がない。いはれぬ弓を引ふより、相應に算盤の、利合を引が近道」と、さも憎體にいひこなす。半兵衛今は堪忍の、胸に迫りし顔色を、卜齋早く見て取て、眞中につよと出、「よしない所望仕出して、半兵衛手前某が、何共迷惑致せ共、武士の權威を立らるゝを、達て共申されず、と云ふて是で果しては、何様も一座が濟みにくひ。中取て了簡せん。弓の稽古は取をいて、是から柔術の勝負を見よ。さあく急いで立合」と、あせれば半兵衛力を得、「いざお相手」と差向ふ。空之進尖聲、「武士町人の辨へなく再三のお望みは、お師匠にも曲なし」と、いはせも果てず、上ヤア無法なり空之進。元より弓馬は武士の藝、取手柔術は町人も身の要害に嗜みて、すはや取ぞと立向ふに、武士は相手にならぬとて、懐手して居らるゝか。是非立合はざ成まいがの」半「然らば有無に及ばぬ事。さあく勝

いかつがましく
—いかめしく
かきにかゝる—
あたまからかゝ
る
ほぐれ—外す

負^ぶ」とせり立^{たつ}れば、義^ぎに詰^つめられて^つ空^{くう}之^の進^{しん}、不承^{ふじやう}く^に身^み拵^{しらへ}、いかつがましく「いざ來^こい」と、かさに掛^かつてつよと寄^よる。半^{はん}心得^{こころえ}たり」と身^みをかはし、互^{たがひ}にあてつ跳^はねあひしが、半兵衛^{はんべゑ}は手利^{てき}の達者^{たつしや}、ほぐれて蹴返^{けかへ}す腰^{こし}の骨^{ほね}、仰向^{のつけ}にどうど倒^{たふ}れしは、心地^{こころち}よくこそ見^みへにける。塵打^{ちりうち}拂^{はら}ひ空^{くう}之^の進^{しん}、はうく起^おきて大^{おほ}聲^{こゑ}上^{あけ}、「表裏^{へうり}者の賣^{ばい}人^{にん}め。重荷^{おもひ}に草鞋^{わらぢ}しめ穿^はいて、平生^{へいぜい}荒氣^{あらい}に働^{はたら}く故^{ゆゑ}、畢竟^{ひつじやう}相撲^{すまふ}同前^{どうぜん}の、暴^{あは}れ業^{わざ}は間^まにあはぬ。いで真劍^{しんけん}の切^き先に、命^{いのち}の取手^{とりて}を見^みすべし」と、既^{かた}に刀^{かたな}に手^てを懸^かくれば、半^{はん}ム、町人^{ちやうにん}の刃^{やいば}にて、侍^{さぶらひ}首^{くび}の柔術^{やほら}を見^みん」と、飛^とで懸^かるを定^{さだ}し七源^{しちげん}八^{はち}、空^{くう}之^の進^{しん}に取^{とり}付^{つけ}ば、十藏^{じふざう}は半兵衛^{はんべゑ}を引^ひきとめて吐^{しゃ}付^{つけ}、土^{つち}お師匠^{ししやう}の御差配^{ごさはい}にて、一端^{いつたん}の無念^{むねん}を晴^はれ、喧嘩^{けんわ}は互^{たがひ}に五分^{ごぶん}の持^{もち}。事相濟^{あひす}んだ其上^{もくの上}に、假令^{たじへ}先^{まへ}から募^もる共^{ども}、最早^{もはや}見^みぬ真間^{まきま}ぬ真^ま、穩便^{うんべん}に治^{をさ}める筈^{はず}。此上^{こゝ}ながら卜齋^{ぼくさい}老^{らう}、空^{くう}之^の進^{しん}殿^{どの}心底^{しんてい}に、憤^{いきどほり}なき様^{やう}に、偏^{ひとへ}に頼^{たの}み存^{ぞん}る」と、さも神妙^{しんめう}にいひければ、卜齋^{ぼくさい}は打領^{うちりやう}き、ト「いかにも某^{それがし}受取^{うけとつ}て、重^{かさ}ねて盃^{さかづき}させ申^{まを}さん。兎角^{うぐい}云間^{いんま}に日^ひも暮^くると、最早^{もはや}お暇^{いじま}申^{まを}さん」と、皆打連^{うちつ}れて立^{たち}ければ、空^{くう}之^の進^{しん}振返^{ふりかへ}り、「偶腕^{たまぐわで}が利^きいたとて、いきり立^{たつ}は商人^{あきんど}故^{ゆゑ}。武道^{ぶだう}は格別^{かくべつ}劍術^{けんじゆつ}が、知^しりたくば此方^{こゝ}へ習^{ならひ}に來^こい。其時^{そのとき}はさつぱりと、首^{くび}と胴^{どう}との別^{わか}れ指^{さし}南^{なん}、ぎやつと言^いはせて見^みすべし」と、尉押張^{じゆおし}張^{はつ}て睨^{にら}み付^{つけ}、然^さも憎^{にく}さ氣^きに立歸^{たちかへ}れば、十藏^{じふざう}親^{おや}

かうても一買う
ても

子は送り出、慇懃に一禮し、次の一間に立歸り、互に無念さを、胸に持てども持ぬ顔。十藏は何となく、「コレ半兵衛、夜の短いに八ツ立、草臥も續いた。寛いでお寝やれ」半「ハア是は勿體ない。若い時の辛勞は、かうてもせいと申します。御老體の養が大事、先お休みなされませ」土「ホウ老ひては子に隨へとは、得手勝手手の諺。然らば行て寝る程に追付まじろみめされい」と、言捨奥へぞ入にける。半兵衛は差俯き、とつよをいつの胸の内、溜息ほつとつき出し、最前の悪言を、無念と思ふ私より、百千層倍口惜しう、お腹が立てなりますまい。天晴山脇十藏と、誰に劣らぬ武士の身を、半兵衛といふ町人を、子に持給ふ故により、いかい恥辱を見せまして、面目なふて成ませぬ。姿形こそ町人なれ、もと侍の忤じやもの、駈入て死んでくりよ。イヤ、夫では仁右衛門殿、よしない武士の子をもらひ、憂目を見ると悔恨み、歎き給はんおいとしや。武士と町人一人の親、中に立ちたる半兵衛は、何れへ孝を立つしと、拳を握り居たりしが、短氣の虫のせき上て、兎角堪忍なり難く、討果さんと覺悟を極め、そつと立て目を配り、奥を窺ひ床に有、硯引寄せ行燈の、火もかき立る筆の跡、死る子細は書かね共、是迄の御恩の書置一通り、さらくと認めて、巻納めたる箱の蓋、新鞆油掛町八百屋仁右衛門殿、

逸興一風がはり

生所遠勃瀋松山脇氏と書所に、奥よりけわしき足音す。南無三寶と懐中へ、隠すとはい
 さ白無垢に、尻ひとつからけ鉢巻締め、手鍮かいこみ十藏は、一さんに駈出るを、半兵衛
 頓て駈塞り、互に顔を見合せて、ハット驚く計なり。半兵衛は取縋り、「死出立にて遽し
 く、逸興千萬何事」と、問はれて猶も氣を苛ち、土「ヤアいはず共知れた事。元來今日の
 口論も、元を糺せば此十藏、娘が事を先立て、彼奴めが妻に貰はんと、一向申越したれ
 共、無骨者を知つたる故、再應使を請けつせず、山名郡の代官豊田新之丞と内縁を取結
 び、家督を立る鬱憤にて、思ひもよらぬ汝に迄、恥を與へし其段は、許してくれよ半兵
 衛。エ、さぞ無念口惜かる。見て居る親を推量せい。即座にうつは知たれ共、汝に怪我
 の有時は、養親への言譯がない。それ故事を靜めたり。半兵衛が一分を、十藏立て遣
 るべし」と、又飛出るを押留め、半「おせきなされな待てたべ。私が名を下さじと、命に
 換へての親の慈悲、忝くは候へども、心を鎮め御思案あれ。出合の詞争ひにも、恥
 を研くは武家の事。町人の半兵衛が、恥といふは駈落か、身上仕失ふたるか。是より外
 は叱られても、打れても踏れても、此境界の今の身に、一分立は候はず。然るに何の御
 生害、覺し留まり給はれ」と、事をわけてぞ佗びにける。十藏は聞入す、「其方許へ義理

乞食にたる法も
あれ一乞食にな
つてもかまはぬ

でない、大坂の養親仁右衛門方へ聞へても、たまく國へ立歸り、恥辱を取にきよろりと、實父がわき見して居るは、よくく半兵衛悪事ぞと、疑はせては猶立ぬ。爰を放せ」と詞の下、半ハアさりとては聞分ない。其仁右衛門も町人、國元へ行き手をひろげ、榮耀をしたと噂せば、悔腹立有べきが、喧嘩の場を穩便に、濟したと聞いたら、いか程か悦ばれん。少しも氣遣遊ばされな。御身の武士に引あてよ、世間の氣々も量れず、かろがる數生害は、御年に似合ぬ御短慮。殊に追付妹が家督定め候由。子孫の爲と思召止まり給へ」とさまぐくに、心を籠めてぞ諫めける。十藏つくぐ聞入て漸と打領き、「ムウ思廻せば一理有。然らば生害止まらん」と、持たる鎧を下に置き、ゆうくとこそ座しにける。半兵衛は悦びて、「御聞入忝なし。逆もの事に御誓言、承はらん」と根を推せば、士侍冥利大小かけ、神もつて偽りない。扱其方はいふごとく、町人の氣になりぬいて、武士の恥は用ひぬな」半「ハテ扱餘り御念が入、毛頭虚言仕らぬ」士「ム、然らば慥な誓言々々」半「ハア何が扱町人冥利乞食になる法もあれ、武士道は立ますまい」士「イヤ町人の誓言は、利慾に迷へばだんも立て。汝に望む誓言は、最前書いた狀箱、只一日見て安堵せん。其誓言が望ぞ」と、せり立られて半兵衛、ハット許にうろつくを、

當言一當てこそ

十藏頓て立寄りて、懷中したる状態を、引たくれば詮方なく、差俯いてぞ居たりける。十藏涙をはらくと流し、汝が短氣を知りし故、襖の間より差覗き、最前よりの有様を、一々残らず見届けし。二人の親の恩計、思ひ出して大殿の、御恩の程は忘れしよな。十の年より御前へ出、小性數多有中にも、勝れて御不便加へられ、其餘慶にて十藏も、不時の御加増頂戴し、喜悅の眉を開きしに、長崎よりの客僧、賢藏主といふ相人、汝に刃の難有と、密に殿へ傳へし由、殊なう驚き思召、御前に人なき折ふし、某を招き寄せ、しかくの御咄、天命とはいひながら、陣中の討死か、忠義の爲に相果ば、高名とも成べきが、短慮の生れ出頭の、當言咎、口論に、討果さんは無慚なり、町人にして一命を、繋けと有の重き御意、元より迷ふ親心、何が扱我子の爲、畏り奉る、とお請申て其處此處と、尋る内に縁有て、仁右衛門方へ契約し、お暇乞に汝をば、召連出し其時の、亡君の御悦び、今見る様に忝し。則、只今指して居る、藍鮫の脇指を、お膝元より取出し、永く武道の絆を切り、町家に住めば一腰は、命の親共主君とも、敬ふてもあき足らず、刃は命を滅せ共、助るも又刃なり、輕々しく用ひなと、御手づから賜はりしは、汝を守る寶劍なり。愛の深きは親なれ共、我子を君にさし上れば、忠義の爲に一命を、惜む

瀧津瀬―湛るく
涙に袖は筏の如
く浮くとなり

丑滿―午前三時

なとこそ教ゆるに、町人にして其方が、安穩なれとの御哀み、親十倍の主君の恩。夫を
忘れて短慮にも、討果さんとは何事ぞ。天命知すの不忠者」と、口説立てぞ泣にける。
稍有て涙を押へ、状箱をしつかと封じ、我印判を取出し、とちめにひしとおし認め、半
兵衛が前に据へ、「心を静めて能く聞け。其脇指は君の魂、此印判は身が魂、書置開くは
死後の事。夫を閉るは太切な、命の門を固むる封印。堪忍の締口を、開くまじとの誓文
にも、起請文にも此文箱、肌を離さず懐中し、是神明のお祓い共、守共印文共、誓を立
て忠孝を、思はど身をば願みて、死でくれるな半兵衛」と、心詞も瀧津瀬に、袖はいか
だと浮きにける。半兵衛前後涙にくれ、物をもいはず居たりしが、押直り聲をあけ、「ハ
ア浅ましや勿體なや。主君の御恩親の慈悲、養父へ孝の三つの海、渡り比べて數ふれば、
假令我身を百千に、碎きても飽足らず。生あればこそ骨に染み、胸にとほりし御異見を、
何しに他になし申さん。ふつと心を取直し、武道は口にも出さまじ。過り入て候」と、
手をつかへてぞ佐にける。十藏につこと打笑て、「出かしたり満足せり。いよく相違有
まいな」半ハア何が扱懸へさぬ」エヲ、嬉しや落付た。是もお主が可愛さ」と、又打と
けし涙なり。はや丑滿の鐘の音に、續くしやんく馬の鈴、門外に聲高く、供人「サア且

蒲團はり一馬に
蒲團敷く

八軒や一八ツに
かく

上の衆一京坂地
方の人
るいせん一類船
ぼつとり一肥え
て愛嬌ある

那八つがなる。あぶ付跡付布團ばり。早ふくく」と呼立れば、半兵衛ハツト立上り、「時刻に及ぶ御暇」十「チ、くくまめで」半「御堅固で」十「是程目出度別れはない。さらりと笑ふてく」と、貞見合するにつこりも、後の名残と三重成にける。

第二

難波津や、賑ふ門もさ夜更で、駈比ぶる鐘の聲、數は幾許ぞ、八軒やあまの漁火と掲けたる、宿の行燈しんくくと、濱風あをつ揚場に、遠近人の下り舟、押並んでぞ舉り寄る。船頭眠りを呼醒し、「サアく著たぞ揚らしやれ、置忘のない様に、諸事改めて」といふ所へ、泊宿の亭主、三笠屋與次兵衛出來たり、「待たく、船頭衆、改める事が有。舟の内から我方に、上の衆じやが二三人、駈落者のお尋ね、島原の色じやけな、残らず舟を吟味して、頼むく」と軒げば、船頭共聲々に、「るいせんの内やうく」と、女中は二人ばつかり、一人は内儀様、一人は若いほつとり様、それく其所へ揚らるよ。勝手次第に穿鑿」と、ざはめく内にしとくと、苦漏る露も情知る、由縁に靡くなき袖や、小袂に色を抱へ帶、華美な姿の女房に、はよの連立其風情、荒し軒端に三日月の、光こほ

喰ぬ顔一信せぬ
顔
こうと一質素

はまつて一敷か
れて

るよ如くなり。與次兵衛立寄て提灯の、影に見るより打領き、「ハ、ア大かた是臭い物。
ぬくく」と断落じやの。追手の衆が此方にじや、いざ御座れい」とせる所へ、次の舟よ
り半兵衛は、遠所よりの歸り足、何心なく揚場に、男女の喚く聲、立寄て小提灯、半「ヤ
ア女房か」半「半兵衛殿」半「是伯母様扱々」と互に餘儀なく見へければ、與次兵衛は猶
うさんげに、扣へて様子を窺ひける。半兵衛はしとやかに「誰方かは存せね共、誰も心
のせく時は、人違は有物。正しく是は身が女房。外をお尋ねなされい」と、いへども與
次兵衛喰ぬ顔、「扱は左様かいか様にも、町方の御内儀には、ばつとこうとな御風俗。御
亭様なら一連かと、思へばそうでも有そむない。はれやれ御麓相申た」と、詞を残し歸
りける。半兵衛打笑ひ、「麓相物と悪銀は、いかさま世間に多い物。して先お千代伯母
様と、何故の上のほり。お袋は御無事なか、どふじや様子が聞たい」と、詞の内よりせ
き立て、お千代はやがて取付を、伯母は駈寄り引放し、「エ、未練な、何にも云やる事は
ない。此方へおじや」と手を取を、半兵衛留めて興醒顔、「伯母御はいかふ不機嫌な。女
房に恨か身に當りか。何共合點のゆかぬ事。お千代どふじや」と尋ねれば、伯母は彌
氣を悶へ、「扱しらぐしい空とほけ。夫にはまつてお千代はの、とほけ倒れになりまし

かたむくろ一堅
 産地
 問はぬも云々
 武蔵鑑さすがに
 かけて頼むには
 とはぬもつらし
 とふもろさし
 (伊勢物語)

お前も一つ云々
 一半兵衛も姑と
 同じ腹
 げでん一怪顛に
 て驚き怪しむ
 しらく一才覺か

ならめふ一並べ
 う

た。はあ是もいふまいさあ来い」と、急ぎ立れば半兵衛は、猶も向ふに立隔て、「夫は餘りにかたむくろ。疑ひまがひも有ならひ、善惡共にいつ迄も、様子を聞ん」と苛ちける。お千代涙の下よりも、「問ぬもつらし問ふも又、むさし鑑のかけてだに、知し召れぬ事ならば、聞て哀をかけてたべ お留守の内に思はずも、姑ざりの力なく、せふ事なさにすごくくと、里へ戻りて母様の、朝な夕な煙さへ、立かね給ふ其中に、四五日かよつて居る内に、此伯母様が京参り、立寄り給ふを幸に、行方定めぬ下り船、淀まぬ水の縁にて 相見る顔は變らねど、變るは今の我身の上。男の心は川の瀬に、譬へてあれど自は、飽れた中とは思はねど、母様や此伯母様は、お前も一つつらさごと、恨みて今のすね詞、云譯をして給はれ」と、口説歎くぞ道理なる、半兵衛「ハツトけでんして、騒ぐ心を押鎮め、「歎くは道理去ながら、不慮に爰にて出逢ふが 夫婦の縁の切れぬ故。思案しがくも有べきぞ、氣遣すな」といひ宥め、「是伯母御お腹立は聞へたり 身共へあたりは不了簡。常月初つかたよりも、参宮致し直様に、國元へ罷越 逗留は只二日、其外は皆旅の空、狀通致さん様もなし。留守の間の云事を、半兵衛も一所とは、廻り過たるお疑ひ。機嫌直して此上の、相談あれ」と佗ければ、「ナフ當どのない事ならめふか。此

さかなふて—よ
くなうて
影ひなた云々—
影になり日向に
なりて妻を愛す
人あいなら—人
つきあひといひ

方と兼て相談の、慥な印は見やしやれ。姑どの直筆、お千代をば去狀。夫婦の中の
きざりは、試の親でも我儘に、さつぱりとはならぬ物。腹かさぬお袋が、心一つで書れ
ふか。是でも物が云るよか」と、半兵衛に投付れば、不審ながら取あけて、つくづく見
れば暇の状。是はと計差俯伏き、二度惘れて見へにける。伯母は恨の詞さへ、胸に餘り
て目に涙。「聞へぬぞや半兵衛殿。此方は元がよし有身、仁衛門殿もれきく。千代が一
家は吹けば散る。此方風情は疎れても、元より縁はきたない物。女房さへ可愛くば、そ
こに隔ては有ぬ筈。姑御のさがなふて、取悪い御機嫌に、辛抱するは何故ぞ。男の顔を
樂みに、暮す女房に口出して、最貞こそ成るまいけれ。影ひなたになる程の、氣骨は折
て遣れても、さのみ人は叱るまい。云ふではないが可愛そに、物もみんな事縫ひまする、
書出し一ツする程の、日は親立があけておく。紡績なら人あいなら、器量は此方の覺て
なり、少の落目ははでなれど、若い時が二度はない、さのみ無理にもあらぬ筈。花の盛
をうるたへて、京の親元三界へ、行ても居られぬ貧しさを、睨みあふても濟ぬ故、身の
片付を奉公と、思ひ定めて連れて來た。嘸本望で御座ろふ」と、たぐひかけく、口説か
こつぞ道理なる。半兵衛終始を聞入て、「成程々々一通りかふ見た所は私に、恨みは

抜やつた一敷い
はち言放つ一斷
言して

道理去ながら、神以て存ぜぬ段、いか様の義も致さんと、立寄る拍子に懐中より、狀箱の落ちけるを、伯母は取あけつくく見て、伯宛名は八百屋仁右衛門様、山脇氏半兵衛とは、此方の事では御座らぬか。狀通は致さぬと、ぬけくと能ふいはしやるのふ。定めしお千代が事である、何の様な酷い談合ぞ。封切て見ましよはい」半「いやくそうした物でない。此方へ遣はされい」伯ハテ紛れない隠すまい。讀んでなり共腹愈んと、既に封印切かれば、半兵衛あはてもぎ放し、箱を開くれば忽ちに、疑ひは晴るれ共、親の異見の命の封、切るに切られぬ恩愛の、深きに換てさがなくも、養ひ母の胸慾さ、思ひ廻せど流石又、隔てし中と義を立て、口には出さぬ品々の、恨は切て目に漏る、涙に晴す計なり。お千代はくはつとせきあけて、「欺しやつたの抜やつたの。其心とは知らずして、母様や伯母様の、恨み誹りを云宥め、半兵衛殿はいとしけに、さもししい心は御座らぬと、はち言放つて今更に、面目ない恥しい。恨めしの男や」と、肩に喰付膝に寄り、身を悶ゆれば袂より、一通の文落ち散たり。半兵衛ちやくと取上れば、其手に取付嚙付て、「大事の物じや戻してたべ 見せては悪い」と周章しを、取て突退け睨み付、半去れた様子が知れかよる。勿體なくも母人を、邪見な心と恨みしが、却つて慈悲であつたよ

いつかい大なる

あめ山一天山

な。暇を取は取たれ共、不慮に逢ふての間に合口。間男の出合宿。伯母御のいつかい返
 禮に、痴話文讀んで聞さん」と、封押切て繰開けば、ゴハ如何に最期の一通。ハツト思
 へど心を鎮めて讀上る。文句「形見ながらに書置の事。一我身拙ふして、半兵衛殿と夫婦に
 成り申メ上は、お二人様をば誠の親より大切に思ひり。され共足はぬ心から、お氣に
 いらぬのみならんに、今迄の御憐み、あめ山忝く思ひり。一夫婦となり申てより、
 ついに一度の詞もあらし申さぬ中に、思ひもよらぬ別を致し候事、よくくの縁の切目
 と悲しさ此事に候。一高麗橋の伯母様へ、歸り候事も恥しく、石町の伯母様京の母様
 何れも貧しき活計に候へば、身を寄せ候事も痛ばしく候。彼是思ひに迫り、命の際に成申
 候。残り多きは盡せぬ中、取分可愛きは宿りし我子、共に消失せ候事、わく方もなき此
 身の因果、夢の世の中とは申ながら、又改めて夢の様に、かへすぐも、はかなく思ひ
 ろくかしくハツト計に讀終り、三人共に差俯き、聲も立ずに泣沈む。お千代やうく
 顔をあげ、「兎や斯ふ思ひ直しても、夫に離れ存らへて、あらぬ命と覺悟して、此世の名
 残母様の、お目にかよつて其後は、身を淵川に沈めんと、思ひ話しに伯母様に、逢ての
 後は折もなく、今迄存らへ候ふぞや。此世の縁は薄く共、未來で永く添ふべしと、樂に

片附一再録

いつまで草一壘
などに生える藁
草、いつまでの
意つりもその縁

した我身をば、酷いと計半兵衛を、じつと見やりし目の内に、恨と戀の二瀬川、滿來る汐ぞ涙なる。伯母は思はず聲を上、「ア、しほらしの心やな。世には去れた夫への、面當の又意地のとて、つい片附も有に扱、命を捨て先の世を、頼むと迄は古の、嫁鑑にも勝るべし。去ながらとつくりと、合點をして見ても、和女一人を親伯母が、頼み切たる杖柱、男へ計道立て、二人に孝はないものか。嫁らそふ共いふまいし、奉公さしよ共申すまい。いか成貧苦を凌いでも、まめな顔見りや嬉しいぞや。必死んでたもるな」と、歎き侘るぞ切なけれ。半兵衛涙押し拭ひ、「思ひ詰たる志、満足せり過分なり。何を隠さん某も、國元で口論し、打果さんと思ひ詰、早書置迄認めしを、親十藏の異見にて、命を繋ぐ封印を、此狀箱におされし故、深き疑ひ受ながら、開く事なりがたし。半兵衛が書置は、父が見付て命をのぶ、今又和女の書置を、半兵衛が見て助くるも、行末目度吉左右なり。町衆又は同行中、たよきまはして近日に、再度内へ呼戻さん。伯母御お千代を暫しの内、此方へお預け申たい」伯母、口では美事捌けれど、いつまで草のつり詞、合點がゆかぬ」と頭ふる。半兵衛は思案して、「然らば今より日を切て、五日が内にさつぱりと、お千代を内へ呼入ん。夫迄のお情を、了簡あれ」と手を摺れば、伯母もやうく

せつばして―是非共工夫して

付しねうち云々―駕籠賃五十文なりと昇夫がいふ言葉は坂東聲なり齋藤賢盛が手塚に名乗りし聲は坂東聲なれはいふ
三百目―密夫の料料は三百目の定め

聞入て、そうさへなれば互の爲。若も五日が過たらば、此方の内へ持込むぞや」半「夫迄なしにせつばして、手廣ふ迎ひに遣ります。違ひはない」の誓文と、互に堅め居る折ふし、カゴ「駕籠遣りませふ駕籠遣い、遣りましょい」とぞ云掛る。幸、東も白んだり。人目を忍ぶ夫婦連、千代をば乗せて駕籠の戸に、付しねうちも坂東聲、さねもりなりと人や見ん。斯る所へ與次兵衛が、噂に寄りし忘八の者、ばたくと駆來り、「此駕籠なは紛者、ソレ引出せ」と罵れば、半兵衛驅隔て、「近比無體千萬。此内は身が女房、荒氣を出さずと通られ」と、斷りいへど聞入ず、「お内儀様拜みたいく」とばれかよれば、半「ヲ女房の開帳なら、先三百目持て來い」巨八「ヤアいつはるまい吐すまい。夫見よ」と駆寄るを、半「ならぬ」と支へて入亂れ、彼方へ押合此方へくづれ、暫し捻あふ其隙に、一人はづして駕籠を明け、提灯掲げびつくりと、「こりや違ふた」と飛退けば、皆一同に首尾わるく、揉手をして腰屈め、「ハ、くくく」結構なお内儀様、是を次手にお近付、笠の御用に立ましょ」と、云捨てこそ迹にけれ。半兵衛怒り押鎖め、本意なけれども親よりの、意見の狀、箱押戴き、「堪忍するが町人風、女房は又當世風、世間の人が譏ふが、母者がくすべうが、此ばつとした佛を、我等が宿のお千代じゃ」と、打連てこそ、三五 歸りけ

る。

第三

地水火風一人の五體は此四つよりなる
八百屋一矢にか
吉野葛一よしにか
かけ以下野菜
ふきの姑一藪の
葉のたぢたるも
の、姑にか
嫁菜一嫁も千代
千代とは云々
千代とは末長き
意なれども女松
草の如く短命に
かく
談議一説教
同行結一同行の
寄合
當屋一番の當り
宿
しゆんだら一醋
になる
つこど聲一尖聲

世の中は、しんきくの新しいつほ、地水火風をかり住居、光陰早き八百屋店內説とも
に吉野葛、練れた親父は結構者、ふきの姑、苦口に、嫁菜の袖をひたし物、千代とはあ
だの女松茸、二世の縁さへ瀬にかはる、淺草海苔と身は焦れ、何としやうがも松露にも、
心計をつくくし、筆には盡ぬ憂ふしや、宵庚申を精進の、だしに仕ふて半兵衛は
晝より出し留主守り、仁右衛門甥に嘉兵衛とて、戀の物馴譯しりが、首尾をくろめる墨
硯、手代利助が算盤も、きのどくとくくと弾くなり、後世の元手の念佛講、闇路を照す小
提灯、仁右衛門夫婦奥より出、「ホ、ウ嘉兵衛、きどくに精が出る。若い間は銀すき、年
寄つての談義すき、是人間の一大事。同行結の掛錢も、ない袖ふつては交際れぬ。今宵
の當屋はいつとも、法度を背いて夜食が出る、酒もしゆんだら夜が更ふ。半兵衛が追
付戻る迄、見世をば明な寝まいぞ」と、老の繰言細やかに、詞のあとも針をもつ、姑は
つこど聲、「半兵衛は今夜戻りやせぬ。表も裏もしめて寝や、夫婦が聲でたよかすば、必

見ざる云々庚申塚には必ず目、耳、口を穿ぎし狼の像あり暖き一粒にかく

熊手性一熊手でかきさちふ程取りたがる欲心

戸をば明まいぞ。合點がいたか」といひければ、与コレ噂さかなふ物をおいやるな。養子に來てから今日迄、夜泊をせぬ半兵衛が、庚申参りすればとて、戻るまいとは何故おしやる」鷲サア半兵衛のまるりやつた庚申様は石町。伯母の所へ先度から、嫁のお千代めが來て居るけな。顔付合せ夜もすがら、庚申待をしをらふ」と、女の性は嫁や子の、中もぼうがい恪氣口。内外の者の聞前も、迷惑そふに仁右衛門は、「はて扱夫もまよにしや。見ざる聞かざるいはざるが、庚申様の御誓願。知らぬが佛南無阿彌陀。南無阿彌陀佛」と繰る數珠の。吃きながら打連て、表へこそは出にけれ。續木の枝は雨露の、惠も薄き桃櫻、半兵衛夫婦が身の上に、今こそ思ひ知れたれ。五日と限る約束の、今日さへ暮れて初夜の鐘、覺期は胸に極まれど、同行中の扱ひを、若やと計頼みにて、知死期待間の二人つれ、親の目ぬすむ夜歩行は、我宿ながら忍ばしく、そつと潛に耳寄せて、内の様子を窺へば、嘉兵衛は筆を持ちながら、つくづく物を思ひ顔、「ナント利助、お婆が先の氣相でも、寺同行の御異見で、邪見の角が折れふかい」利「イエく存じもよらぬ事。生れついたり熊手性、今度の起りも根が愈から。按摩取の印可めが、跡先なしの饒舌口、さる浪人の娘とやら、年は十八敷銀は、大金で七十兩、氏系圖より慥成商人へ遣たい、

わくしいわろ
 騒がしい奴
 耳より何より
 よい事を聞く

まいくと
 ろくと

ける程に強め
 る爲にかさねて
 いう詞

と頼まれますと聞と早、わよしいわろが小聲に成り、何様やら夫は耳よりな、兼々お主も知る通り、役に立ずの嫁御寮、さらりと去て其跡へ、どふぞ世話して貰ふてたも、燭を仕てこい一杯と、天目酒に呑こんで、先へ云込む此方へも、返事聞せてひつそく、頷あひの最中」と、聞くさへ胸も冷やりと、お千代は其所を立退ど、半兵衛はまだまいと、這入たそふに覗き居る、袖口取て引戻し、手扱衆の返事迄、待事も無い我々が、最期の衣裳も守り迄、小宿へ出して有上に、うろくそこに居給ふは、今の咄しにお心が、残りやする」と恨むれば、半ア、由ない事をいふ人かな、おれは心が残らねど、去れた其方を此内へ、呼戻したる心にて、中戸口から手を引ば、夫ぞ誠の夫婦連、恨み悔みも晴ぬべし。思案こそあれ暫く」と、立忍せて半兵衛は、潛押あけずつと入、半兩人共に待たである。日暮れぬ先に戻らふと、思ひの外に當月は、いつにかはつて大参り。子細を聞ば去ぬる夜、音楽響き花降て、雲中に御聲を上、庚申の御神體、青面金剛童子とは、文字も青き面と書く、青きを好み給ふ故、青物賣を守らんと、新に御告有し由、言傳へ、聞傳へ、市の側から打あけて、参る程にける程に、御門前から押あふて、鰐口の緒へ取つく迄、ゆつくりと三時半。斯る尊き物語、聞て内には居られまい。嘉兵衛も利助も参

つて來い。參れ〜」とそやさされて、常も利助は飛介で、帶もそこ〜駈出れど、嘉兵衛はじろりくわんとした、顔つきさへも氣味悪く、稍暫しためらふて、半「親父や婆は同行衆、兎や角と有挨拶に、夜明でなくば歸られまい。隠れて嘉兵衛も參つておじや」嘉「いやまあ止に致しましよ、相場の悪い折節、ひよつと知れたら彼婆が竝大體じや有まい」と、取ても付ぬ挨拶に、重ねて返す詞なく、半「成程夫は能い嗜み。其心から此比は、商賣に精がいる。旦那衆から青物の、御用はいふて來なんだか」嘉「誠に忘れて居ります。平野屋殿から、明日は振廻をする、半兵衛にちよつと參れとお使が、二三度も立ました」半「ム、左様であろ〜。行かすばなるまい去ながら、殊の外なる草臥やう、名代に往て聞ておじや」嘉「イエ〜先より念入て、獻立も相談する、直にと有の御使、御太儀ながら」と動ねば、半兵衛わざと腹立聲、「子細をこねる男が有。獻立一つ書く程の、器量を持ぬ其方なら、明日にても半兵衛が、死だら八百屋仕まふか」と、きめ付られて是非もなく、不審顔して出て行。影見送つて表へ出、千代が手取て引入る。跡は戸鎖に詮方も、涙、先立計なり。千代は覺えず聲を上、「移れば變る世の中や、二人添寢の諸白髪、千年と頼む我家を、今日は冥土の旅やどり」手馴し襖押入も、名残惜けに彼處此處、見世の

打明ぬ—事實を
打明ぬ

先成小板敷、撫つ擦つと戴いて、「仁右衛門様の折節に、爰に座つておはせしと、思ひ出
すも懐しや、不調法なる自が、悪い所を蔭になり、日向になつて明暮に、姑御へのお取
なし、數限なき御恩をば、死しても如何で忘るべき。去るよ朝も贈して、手づから御膳
据たれば、物をも云ずほろりつと、泣いてお箸を取れたる、其面ざしが見おさめと、な
り行身こそ悲しや」と、咽返るこそ道理なれ。ともに鳴音の半兵衛、「尤なり去ながら、
そなたの事は數ならず。國を離れて十五年、誠の親より大切に、介抱有し甲斐もなく、
先立ッ我は不幸とも、物知ず共思されん。御心底こそ恥し」と、しやくり上てぞ居たり
ける。よそにも嗚な袖の雨、風呂敷包手に提て、嘉兵衛すたく立歸り、しやくれど明
ぬ表口、割る計に打叩く。二人ははつと立上り、うろつく内に外よりは、「明けよく」と
と喚く聲。半「およくくとと計にて、彼方此方と這廻り、やうくと身を押込に、千
代を忍ばせ半兵衛は、戸を開れども打明ぬ、胸塞りてきよろくと、物をも云ず立まへ
ば、嘉兵衛も共に隅々を、覗き廻りて押込を、明んとするを立隔たり、半「嘉兵衛慮外な、
何故明る」嘉「ハテ珍らしい御咎。此押込は道具入、用が有て明まする」半「イヤく用が
有にもせよ、宿へ戻つて直様に、其上包んで手に提しは、何方で取て來た」嘉「ム、風呂

とろくー底

字持鮒ー姫める
千代をさす
吸物ー推量にか
恨葛餅ー葛の葉
は風に裏を見す
る故續けたり
押當ーよい加減
に
手だれー巧者

敷包の疑なら、是御覽あれ赤毛氈」半ハテ似合ぬ物を持って居る」嘉イヤ様子は追て申べし。夫婦の衆の留守の内、櫃のとろくへ納ん」と、明にかよれば手を取て、半「近比小氣な男かな。見付られたら半兵衛が、遠嘉土産といふてをけ。先下になるよ商賣の、返事が聞きたい獻立は、何様じやく」と紛らかす、詞のはづれ顔の色、心は付どつかぬ振、押鎮りて畏り、嘉明日のお振廻、お客の方から獻立が、謎に致して参りしを、有増計覺書、聞き召」とぞ讀上ける。文句「先本汁に大寺や、邊に遊ぶ童は、ちしや白魚と知れたり、有情非情の乗合に、棹なき舟の行方とは、貝焼などの事ならん。木の葉折敷其上に、から紅の心中とは、憐とぞ見る子持鮒。添ふに添れぬ中々に、寧刃に指身とは、包めど我が吸物に、幾度肝を冷し物。思ひ直してたび給へ。折が替れば氣も替る、又面白く獻立の、出来まい物にも候はず。定めなき世は人の常、何をか恨葛餅が、後段の筈に候」と、心に餘る異見狀、押當てこそ讀にける。半兵衛はさあらね顔、「扱面白き獻立や。併魚類の振廻を、なぜ肴やは請取ぬ」嘉「されば夫にも話有。お出入り致す魚賣に、堀江彌兵衛と申せしは、器量は左のみよからねど、戀路の手だれ上手者、惚れたお山が三百人、忍んであふが四五十人。中にも若松やなをと、互に腐り合、女房に持ぞ持たれん

せたげられ―責められ

うちら―ちは助
辭
みのづるしーみ
のぼし

と、契をかはず間々に、市とやらいふ生娘と、ちえくくり事がこふじてきて、はや五月の腹に帯、隠されもせず親も知り、つい呼入て嫁廣め、祝儀の樽を送るやら、三國一を諍ふやら、其所ら近所がざよめけば、なをが燃立つ胸の火に、よね傍輩が焚付て、彌兵衛が往て居る先々へ、付て廻つて恨泣、喰付嚙付しがみ付、去るか死か死か去るか、二つ一つとせたけられ、孕んだ女房は去されず、なをは彌々堪忍せず、是非に及ばず心中し、難波の野邊の草の露、名は繪双紙に留まりぬ。色と義理とに迫つては、日比の智恵も出ぬ物。其所が膝とも談合で、此方とが様な者にてても、明していはよどふぞ又、死なさぬ首尾も有べきに、聞へぬ堀江の彌兵衛や」と、むしりかけたる口占に、半兵衛ぎよつと行詰り、物をも云す押込の、内にお千代はわくせきと、身を悶へたる胸ふるひ、襖に響き敷居迄、びりよくと鳴渡れば、女はうちらで鼠なき、男は外から猫の眞似、憂が中にも可笑けれ。嘉兵衛そろりと立上り、「みのづるしなどひかれては、もとが子になる穿鑿」と、つかくと立寄るを、半兵衛あはて突倒し、「嘉兵衛お主も相應の、悪所遊びもする男、ひよつと出合の初戀を、見現しては興がない。其所らは粹め氣をとほせ。とほせく」と佐にける。嘉兵衛疊打叩き、「あんまり夫は曲がない。なぜ有様におつし

おもはゆげ一朧
かしさうに

やれぬ。私事は二三度も、追出されたる身なれ共、伯父仁右衛門に色々、侘事立て給はりし、お前の情で立て居る、嘉兵衛に何の遠慮が有。いか程隠し給ふても、聞ねど知た御心底。同行衆の扱ひが、叶へば重疊さもなくば、刺違へんとの云合せ、見付た所は違ふまい。切なふも悲しうも、思召さるゝ筈なれ共、死なんと迄は短慮の沙汰。世に心中も多けれど、銀に詰るか逢ふ事の、ならぬ切迫の時にこそ。八百屋と云ば輕けれど、勝手乏しい事はなし。上町邊に貸屋をかり、行通ふても逢給へ。假令五貫目三貫目、帳面合ぬ事あらば、嘉兵衛一人が引負て、お二人の名は出すまい。命の替に立たいと、思ひこんだる。私が、詰らぬ異見は、仕らぬ。思案をかへて下さりませ。縄付ても取付ても、中死せはしませぬ」と、誠を立る男泣、優しくも又わりなけれ。半兵衛も稍涙ぐみ、「慈悲成親の血筋とて、頼もしい氣を持つものかな。其心共汲知で、隠せし所が面目ない。お千代く」と呼かくれば、おもはゆげにも立出る。目は泣腫れて顔瘦て、見交す計、打守り、「ナウおいとしや」と、いふより外はなかりけり。半兵衛心に思ふ様、死ぬるといはば此者が、付纏ふて放れまじ、賺して此場を脱れんと、世に嬉し氣に打笑て、「實負た子に教へられ、淺瀬を渡るといふ如く、其方が異見にて、兎や角思ひくづおれしも、洗ふ

た様に打晴れた。借屋の事も内證も、萬端お主を頼み入。當分は先親里へ、戻してをくが
 能い道理。女房、嘉兵衛に禮いや」と、僞知す目くばせに、お千代もやがて合點して、
 「お志の數々は、どふも詞に盡されず。夫婦が命の親様」と、手を合すれば此方にも、
 嘉「若輩者のいふ事を、得心有て嬉しや」と、誠と嘘の笑ひ聲、夢に夢見る如くなり。
 仕濟したりと半兵衛は、お千代と共に立上り、半伯母の方迄宵の内、送り届けて明朝は、
 古郷へ送るべし。親父や母の歸られたら、未庚申から戻らぬと、ときく、首尾を合せて」
 と、云捨行くを引留め、件の毛氈差出し、嘉お駕籠の内の敷物に、進上致すと申義は、
 慮外がましく候へ共、嘉兵衛が爲の寶物。追出されたる其砌、朋友どもが指さして、疊
 の上では死ぬまいと、陰事いふが無念さに、心をなをしていんで見しよ、夫とも願叶は
 ずし、辻かいもとで死ぬる共、毛氈敷いて居るならば、疊の上も同然と、意地を立てた
 が身の幸、二度此家へ立戻る。嘉兵衛にあやかり給へとの、御祝儀なり」といひければ、
 お千代はじつと笑顔して、「何より嬉しいお心づけ。此毛氈で夫婦づれ夜の花見に參らん」
 と、詞のはづれ氣も付かぬ、流石若氣の不覺なり。然る折節仁右衛門夫婦、同行衆と高
 咄、はや門近く立歸れば、嘉兵衛騒がずお千代をば、小櫃のさきに屈ませて、半兵衛共

叶はズレ葉は
 ズして

いはれぬー無用
引つかけるー茶
碗酒を呑む事

あへんどー何の
返答も
ふくれー立腹
ひげこー竹の端
を編み残したる
竹箱

ちんくー仲善
し

に椎茸の、蒼を選つて居たりけり。仁右衛門戸口に立休らひ、「太郎兵衛殿五右衛門殿七兵衛殿には取分けて、遠方といひ夜も更ける、ひらにお歸り遊ばされい、七ハレヤレいはれぬ御遠慮。おひざをだきに三人が、申合せて參るから、七兵衛一人は歸られぬ。夜食は喰る引つかける。煙草二服御亭主の、お氣扱には成まい」と、明くる潛戸我一と、せり合ひ内に入にけり。五右衛門先へ進み出、「早速ながら申まじよ。御夫婦共に能ふ聞かしやれ。是の嫁御が去られても、手前に損も仕らず、呼戻されても此方に別に利徳もなけれ共、よくく懇意に思ふ故、宵から今迄三人が、取付引付願の、かいだるいはど佗びれ共、あへんどもうたれぬは、悔つての義が但又、大切な事他外で、言づてわざな仕方じやと、ふくれればし有てかと、是迄附いては來れ共、いふべき程は最前に、底を叩いて仕廻ふた故、急に才覺成りませぬ。兩人出やれ」と押しすさる。太郎兵衛ひけこに腰をかけ、「夫婦合に別義なし、不義放埒だに有らざれば、何をしおと、何を非難に去なすべき、姑去に極つたり。假令五日が十日でも、お千代の顔を見ぬ内は、太郎兵衛が朝夕を、此内で養はれん。かたぐ、如何に」と佗びにける。姑はつよと出、「ア、太郎兵衛様よい推量。仁右衛門殿は佛様、女夫の中はちんく、去なしたは此母。お前の様なよ

ひづみ—ゆがみ
衰ふる
佗言の手は云々
—佗言のすべは
ないやうになる
八文字は云々—
八文字に歩く様
なはてはなけれ
ど字一字書けぬ
が難なり
結構者—すなは
なものの
冥加—茗荷にか
く
ところ—所と野
者とかく

い衆の、嫁御にしては似合ふが、此方づれの内にて、飯をも焚かにやならぬ身で、肌には小袖鼻紙は、延でなければ手に觸れず。わし等はお寺の奉加さへ、百目の銀は太儀な、五兩とやらの櫛をさし、烏甲ほど鬢出して、太夫の道中する様に、狭い所を八文字、其所らあたりの青物は、踏潰されて芥になる。其つひゑでも積つたら、此身代はひづみましょ。是が八百屋のお内儀に、成り遂げふか」とゑせ笑ふ。七兵衛にじり寄り、「此方の様にいひ立れば、佗言の手はあがれ共、何所を聞ても其様に、よい事計はそろはぬもの。身共が嫁は随分と、世帯は能うする歩くにも、八文字は踏まね共、一文字を得引かいで、是も又氣の毒。仁右衛門殿、其方も少と物いはしやれ。噺が怖さに黙つてか、結構者じや」と囃されて、三あんまり自慢あそばすな。結構とは冥加の事、とうなんとはところなり、せいなんととはせりの事。半兵衛連添ふお千代なら、小殿原では御座らぬか」セ「もし闇の夜つれをのこ、心中などを召れたら、取返しはならぬぞや。少相談もして見給へ」三如何にもおしやれば其通り。若い奴等の事なれば、短氣を出すまい物でもなし。腹に物いひ有共聞く。孫を愛して遊ぶなら、嫁の憎さも忘れん。ナウ噺何と思やる」と、やはらを入れて占問へば、選いか様此方は如來様、二三十年身の油、紋り溜めたる金銀

が、忽ち水になる事を、見ながら嫁が可愛くば、はてどふなりと成されませ。したか私には暇下され。短い浮世に氣に入らぬ、顔見て修羅を燃やそより、頭こそけて未來をば、助かる様に致そふ」と、緩む氣色はなかりけり。仁右衛門今は詮方なく、「半兵衛嘉兵衛爰へ來い。様子は今聞通りの事。いかにお千代に添ひたふても、母を坊主にや仕られまい。叶はぬ事と思ひ切れ。扱又嘉兵衛も能つく聞け。今では心持直し身を持そふに見ゆる故、幸甥子の事なれば、家督にせんと思ひ付、嫁を追出し半兵衛も、出て行く様に仕かけるも、世間の人に謠はれては、仁右衛門が名が汚れる。一夜も足は留めさよれぬ。今出て行け」と云渡す。嘉兵衛驚く氣色もなく、「お前の詞を請けずとも、此方から出て行くこと、思案極めてをる故に、恨には思はぬが、胴慾なは姑御。嫁一人が憎いとて、大勢に憂目を見せ、嘉兵衛は爰を出て行くと、明日から路頭に立ますぞや。お寺参りの行戻り、薦を冠つて附廻らば、餘りみめでも有まいが。夫でも嫁が去りたいか、堪忍がならぬか」と、恨みてもかこちても、心つれなく返事せず、見向もせねば詮方なく、すつと立て行所を、半兵衛は引留め、「ヤレ狼狽者何所へ行く」翼お隙が出たで去にまする」半「先待て」「イ、ヤ」「暫」とて、押合へし合引据へて、半「コレ親仁様、早まり過ぎた御

了簡たうけん。母ははの言分いひぶん一々に、尤もともと至極しじやくと思ふ故、千代ちよめは身共みどもが去りました。誰たれに恨うらみもないか
 らは、家出いへでを致そふ様がない。それに此者おひた追出せば、結句けつくにお名なが出る事。同行衆どうぎやうしゆにも
 今迄いまの、千代ちよめが扱捨あつかひすてをいて、親仁おやぢさま様へ嘉兵衛かへゑをば、佗言頼わびごとのみ存ぞんずる」と、聞きくよ
 り三人さんにん領合りやうがひひ、「婆はははこちとが手てに合あはぬ。仁右衛門にゑもん殿の結構けつこう者。嘉兵衛かへゑ事を佐わびます
 る」与よハテ何様なにさまなりと御意ごい次第しだい」三人さんにん「あんまり早はやふて本意ほんいない」と、笑わらふてこそは歸かへり
 けれ。母ははは免角めんかくの詞ことばなく、奥おくへはひれば仁右衛門にゑもんも、入いらんとせしが立戻たちもどり、「半兵衛はんべゑ一
 つ飲のんで寢ねや。酒さけは愁うれひを拂はらふとは、醫書いしょには書いて有あけな」と、しほくとして入いりにけ
 り。親おやの恵めぐみは深ふかけれど、御縁ごえんは今いまが限かぎぞと、お千代ちよもそつと道出みちいでて、共ともに見送みおくる後影うしろかげ。
 嘉兵衛かへゑは何なにの氣きも付つかず、縮明しゆめいにする潜戸くもりど、「早はやふく」と招まねけども、猶なほも名残なごりは鴛鴦せしやう
 の、泣なかじとすれどせきかねて、わつと叫さけべば漏もらさじと、打うちかぶせたる毛氈もうせんの、闇やみよ
 り闇やみに 三重みへ出いて行く。

道行みちゆきほしのかす

二上にじやうり歌うた われが戀路こひぢはいとなき三味さんまいよ、く、なんのねもせで泣明なみあす。見れば思おもひの雲くもの
 帯おびく、扱あつかひも短夜みじかよ、心こころのせくにござんせ。いやとおしやろとこちやもふ、そふさんせ。ふ

ねもせて一ねは
音ねと寐ねにかく

絮こ集く一借いしにか

田みのの島―難
波鴻汐みちくろ
し遷衣田渡の島
にたづなき渡る
(古今集)

よしあしのや―
やは助辭よしあ
しは難波の縁
うつぼ―現を受
けて新郷の家を
さす
ちしごくる―
―知死期か来る
と縁るとかく
隅の雲―始の邪
魔

聞く共云々―冥
途は恐るしと聞
くとも死ぬ決心
はかはらぬ
みつせ川―三途
の川
綱手―引き船
年に一夜―七夕
をさす

たりが中に名取川、およそれ、ふたりとく名取川、ぬれて涙の血に染むる、田みのの
島とよみおきし、難波の事も是ならん。よしあしのやかはる世の、それも思へば夢うつ
つ。うつほを出でて二人連、色のほかなる色毛氈、ひじき物よとかたにかけ、つらき名
残も今宵ぎり。生れかはりて先の世は、逆も殿御の古里の、はま松風にさそはれて、離
れぬ中の陸言を、あだになさじと思ひつめ、よるの玉ほこ道いそぐ、ちしごくる―數
珠のかず、煩惱菩提ときく時は、あの世ばかりの樂に、ゆかんとすれど卯月やみ、涙
にくれて道みへす。思ひまはせばはかなしや、かはせしことの淺からぬ、隔の雲のかさ
なりて、二世とちぎりし中をさく。月にみづまさ花に風、津村の土手をあだしのの、其
佛と草深き、螢かすかに飛びつるよ、身より思ひのあまればや、虫さへ胸をやこがすら
ん。夜もはやいたくふけぬらん、わけとなき行郭公、實めいどの鳥ならば、地獄の有様
かたれきこ。聞く共いかでかはらめや、今宵限のうき命、とめてとまらぬみつせ川、岸
につなぎし綱手こそ、弘誓の舟と觀念し、歎く心はくもれ共、くもらぬ空の星月夜、あ
らまほしやといふ星も、年に一夜の契ぞや。たとへば雲の上とても、天の川をへだてな
ば、人のつらさにかはらじな。糸かけ星のほそくと、つきそひほしや妬むらん。思ひ

すばる一耶星にて縮まるにかく

十ぐわんと一三十三所の重願寺と十願
利劔即是般舟讚に利劔は即ち是彌陀の號一暨稱念に罪皆除かるとあり
四手のたまさ一郭公

ほしとは七夕の、ゆかりと聞けどまよならぬ、うき世に似たる類ぞや。光も薄くうしとらに、あれく見ゆるほし様は、ヲ、假のうつよのほし佛。やどり星とはいつまでも、妹脊かはらぬ夫婦あひ。我身のはてはすばるほし。ア、思ふまい心から、たとへ奈落におつるとも、三下り祭文あとにかへらじさりながら、女はいとど罪深く、したがふ道も忘水あはれ都のひほのほし、結目とけて濁江に、うかれし事を思ふには、あまねきかどに立寄るも、爰ぞ一ねん十ぐわんじ、念彼觀音のちからほし、助け給へともろ共に、心をこめてねがひほし、みだれ心のみだると共、利劔即是の誓にて、心やすく極樂に、いたりいたらんこなたへと、互にいさめすとむ身の、勸進所にぞ著きにけり。捨つるに極めし身の上も、そごろに心細けにて、三途の川は目の前の、麥吹く風のさど浪や、空さびしくも名乗るてふ、四手のたおさを友がねに、さいたら畠の案山子かと、見るにつけ聞くにふれ、あの世にたぐふぞあぢきなき。半兵衛おちよにさしむかひ、「此勸進所のお寺には、談義のたゆる時もなふ、千萬人の參詣に、一遍づつの御廻向も、つひに罪障消滅の、法の縁こそ頼もしき。爰ぞ最期の場所」と、やがて用意を敷きかくる、朱のしとねの毛氈や、「嘉兵衛がくれし其時は、長く身上持ち固め、町屋に住宅すへよとの、心には

人間一生云々！
變化極りなきを
いふ、禍之與福
今何異「糾纏」也
(文選)

ぎるんー縁喜
流の女ー遊女

今引きかへて、死出の門出の相むしろ、未來は蓮の臺共、變じて浮むよすがぞ」と、二人靜に座をしめて、「人間一生あざなへる、繩のごとしと傳へしは、今日の身の上。八軒やで出合し時、互に書置あかしあひ、あやうき命を夫婦共、のがるよ上は生さきも、諸白髮迄そひはてん、思へば愁のふみではなく、結の神の守札、末頼もしやめでたやと、祝ひしことも夢現、さむればもとの書置よな。とても角ても死神に、引るよ縁は辻占の、時のぎるんもなき物」と、身を觀じてぞるたりける。おちよはいとど打萎れ、「心中とかくふた文字は、流の女に限りしと、昨日はよそに思ひしに、今日は夫婦が身の上に、飽きもあかれもせぬ中を、よしないさはりに隔てられ、あだにくち行是非なさ」と、ひれふしてこそ泣きにける。半兵衛涙にくれながら、「ア、愚成くやみ事。とかく二人がくさり合、きられぬ縁を恨むがよい。女房さるに七つの法、去らぬに三つの教有、中にも親の氣にいらぬ、女房にそふは不孝也。又いに所なき妻を、去るは夫の義にあらず。とくにいとまをやつたらば、孝行の道は立。しかしそなたの親里は、養ふふぜいもない貧家、すりやいに所ない同前。さるにさられぬ教なり。此二道にさしつまり、かく成くたる有様は、もとより覺悟」と詞には、いへ共もると露涙。「いたはしや十藏殿、つねさへ武士

はに顯はれ一顯
に顯はる

入まへの程一晩
年

のつきつめた、氣質ながらも半兵衛は、武士を捨てよと御異見は、我行末を安穩に、あらせん爲の教をば、今やみくくと死したらば、さぞやおくやみ歎の程、思ひやるさへ勿體なや、養親の仁右衛門殿、おきのよはい生付、此わけを聞給はど、老後のうれひ持病のたね、かれといひ是といひ、一方ならぬ不孝の罪、空恐しき身の上」と、くどき立ればおちよも又、ほに顯れて叫入り、「ア、我とても道ならぬ、歎きをかくるは同じ事。老ひたる母の手一つに、そだてあけられ人となり、丁度今年が廿四の、年重なれどけふが日迄、是ぞと思ふ孝もなく、終には刃に身を果し、愁を見する計かは、入まへの程世渡る業、老の湯水は誰取て、御心をやすむべき。不孝共つたなし共、我からわかぬ身の上を、許してたべや母様」と、ほとりも知らず手を合せ、わつと計に泣きまどふ。半兵衛は顔を上、「いつ迄いふても同じ事。夜明ぬ先にさいごをば、心靜にとぐべし」と、西に向ひて手を合せ、「利劍即是彌陀號、南無阿彌陀佛」と廻向する。おちよはしづむ涙さへ、落ちてかほかぬ小硯を、懷より取出し、「かふならふとは知らずして、西の宮參して、須磨や明石の名所をも、しるしをかんともとめしが、今引替へて書置の、御用意もや」とさし出せば、半「ナフよい合點去ながら、我一代の書置は、懷中の狀箱。心にも文言に

も、死する時節に二つはなし。そちこそ早ふ書置しや」千代「イヤわしとても先立て、さ
 られた時の書置が、をば様の手に有からは、是ぞ末期のとどめ筆。あだの思ひの數々は、
 迎もに書きはつくされず。しかし辭世の言のはを、残し給へ」とすよむれば、半兵衛うな
 づき筆を取、「けに世の常に死したらば、野邊のをくりの引導に、一句一偈もうくべきに、
 此まゝ行かんはかなさよ。そなたも一首口ずさみ、自是を引導共、經帷子のほんげ共、
 廻向の種」と案じつと、硯引寄せ書付る、文字もちらく星月夜、讀みつづけたる其歌に、
 「はるぐ」と濱松風にもまれきて涙にしづむざよんざの聲「おちよ同じかく計、」古
 を捨てばや義理も思ふまじ朽ちてもきえぬ名こそおしけれ」と、兩首一所に巻きおさめ、
 半兵衛は懷中より、件の状箱取出し、辭世に相添へ前にすへ、思ひ入たる體なりしが、
 胸押し寛げ脇指を、すらりとぬいて脇腹より、前へなかばひき廻す。おちよは取付聲を
 上、「こは情なの御事や。女は心おろかにて、覺悟してさへうろたゆるに、ひとり先立給
 ふのは、扱は我身を捨つるのか。恨めしやどうよく」と、もだへふるひて歎きける。半
 兵衛ちつ共わるびれず、「女心の淺はかさよ。是程の手で死なんとは、おろかなりく。
 様子有ての切腹、かゝへ帯を二つに切、其一筋にて切口を、いそいでまけ」と聞よりは

末期の祝ひ―姫
みて五月になれ
ば帯の祝ひあり
その帯を岩田帯
といふ。

かみかたかれ―
頭堅くあれ

や、あはてよほどくかよへ帯、心は何と白縮緬、用意の剃刀取出し、せきくるふ手もふるひながら、やうく中より押切て、夫の肌を引廻し、しつかとしめてうろくと、顔を詠めて涙ぐむ。半兵衛詞おだやかに、「そなたがさいごの身も見ず、何しに先立行へきぞ。此脇指は某が、此地へ養子に来る砌、主君よりの拜領、武士の刀は忠義を旨とし、町人は又禮義にさす。太切の一腰を、武道にも用ひず、禮義にもかよはらず、けがらはしき兩人が、さいごに計つかはん事、勿躰なし冥加なし。武士のまねして引廻すは、主君への追腹。山脇氏に立もどれば、親十藏が封印も、やぶつてやぶらぬ道理なり。是からそちと死ぬるのが、今の八百やの半兵衛ぞ」と、齒をくひしめて息をつぎ、「是おちよ、其半分のかよへ帯、そなたが腹にしつかとしめ、四月に成かならぬ子に、せめて末期の祝ひおさめ。世に有ならば來月は、帯の祝やお乳母よと、さもいさましく有べきに、明日をも待ぬ今の身は、五月共産月共、つどめて名残おしむぞ」と、そごろ涙にくれにける。おちよは帯を取上て、しやくり上く、前後涙にしづみしが、「生れぬ先に行末をかみかたかれといはた帯、それは世に有人の事、是はそれとは引替へて、永き別れの親子の縁、かくなる身とは知らずして、嬉しや子をばうんだらば、二人が中の樂に、明

やつす一筆す

うぶすな様一子
生れて百日目
此神に参る

じんぞう一晨朝
にて卯の刻の鑑

暮抱いつすかしつの、愛らしい事見る度に、憂が中をも打忘れ、夫婦は猶もしたしみの
媒と成、一つには、世には子をもてば世帯じみ、なり形をもやつすとや、然らば我が思は
ずの、だても自然とやらむである、姑御にも氣にいらふ、あふ嬉しやなうぶすな様、平
産させて給はれと、願ひしことは、徒に、身持ながらにきえて行、名残は我身一つにて、
別れは二つ人間の、種を斷つのも同じこと。何のとなき腹な子を、共に死なする不便
さよ。ゆるしてくれよ」と詞さへ、なくく帯を取上て、肌に廻し引しめて、「貞見ぬ母
が形見ぞ」と、かつばとふしてなきにける。早引渡す山かづら、寺のじんぞう告げ渡れ
ば、「いざや最期の時こそ」と、座を打拂ひ身がまへす。おちよは覺悟の面ざしも、名残
の花のあてやかに、露持餘る風情にて、手を合せてぞ座しにける。半兵衛につこと打笑
ひ、「チ、出かしたりいさぎよし。未來は一所ぞ迷ふまじ。今ぞ限り」と脇指を、取直せ
しがさすが又、永きわかれの顔ばせに、心もさはぎ腕たゆく、さしつけてはためらひ、
突かんとしては堪兼ねて、しばし時刻をうつせしが、「なむ三寶おくれし」と、氣を取直
し一心に、「南無阿彌陀佛」と刃のさき、喉にぐつと突通せば、あつと計に身をもたへ、
手足をのべて苦しけな、中にも夫を打守りくたる一念の、輪廻の心ぞ果しなき。され

四つのかり物
地水火風
出―發語にてど
れ

共四つのかり物を、かへししまへば油なき、燈火きゆる如くにて、がつくりと伏す右様
 は、哀にも又おしかりし。「出追つかん」と半兵衛、主のゆかりの一尺五寸、最期のきは
 と押戴き、只一刀にのどぶえを、貫かれて死したりけり。生年既に三十八、花過比の若
 緑、木の下闇は青物や、町人なれど古への、武道の燈がよけたる、末に名をこそてらし
 ける。